

NPO法人グローバルリーダーシップ・アソシエーション(GLEA)の
メールマガジン第169号をお届けします。ご意見・ご感想は<glea@npo-glea.org>まで。

◆今号の内容

1. トピックス
2. 最新の活動情報
3. コラム『私にとっての交渉コンペ ～特に仲裁の部について～』弁護士 大澤 恒夫 会員

1. トピックス

◆新年のご挨拶

昨年は弊法人をお引き立ていただき、誠にありがとうございました。
本年もご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

◆第22回大学対抗交渉コンペティションが開催されました。
詳細は<2. 最新の活動情報>にて。

2. 最新の活動情報

◆第22回大学対抗交渉コンペティション

12月9日(土)10日(日)上智大学及で開催され、国内および海外の22チーム(国内19大学、海外2
大学+1チーム)が参加しました。

<対戦の結果>

- 第1位 東京大学
- 第2位 チーム・オーストラリア
- 第3位 京都大学
- 第4位 上智大学
- 第5位 大阪大学
- 第6位 シンガポール国立大学
- 第7位 明治大学

大会の詳細についてはウェブサイトをご覧ください。

<https://www.negocom.jp/>

住友グループ広報委員会のウェブサイトにて大会記事を掲載いただきました。

<https://www.sumitomo.gr.jp/committee/event/college/>

3. 今月のリーダーシップ情報【コラム／column】

大澤法律事務所 弁護士

大澤 恒夫 会員

『私にとっての交渉コンペ ～特に仲裁の部について～』

私は2004年から大学間交渉コンペティションに審査員として参加してきました。交渉コンペは周知のように、仲裁の部と交渉の部があります。私はIT企業の社内弁護士をしていたことがありますので、ビジネス交渉をした経験はあります。しかし、仲裁人の経験はありません(ソフトウェア開発紛争のADRで調停人や中立評価人の経験はあります)。

仲裁人の経験はないのに、交渉コンペではおこがましくも、審査員として仲裁人役で参加する訳です。それでどのように仲裁人役をするのか。まずは当日までに問題文を相当、読み込みます。設定される問題は毎年オリジナルに作成され、私自身が全く未知・未経験の分野の、世界の最先端に行く複雑で高度な国際取引に関するもの(今年の問題は宇宙ビジネスに関するものでした。)であることがほとんどです(そのためコンペの問題を通じて私は初めての分野に触れ、大いに学ばせてもらいます)。それだけでなく、レッド社もブルー社も五部と五部の論争をなし得るような、しかし、議論の組み立てには多大の苦労と創意の発揮を要する、非常に難しいものです(私自身、考えに考えて、ようやく自分なりの筋道がおぼろげながらに見えてくるかなと思えるものです。今年の問題も相当に難しいものでした)。

そして私は仲裁人として、真の争点は何なのか、腑に落ちるまで理解しようと、両当事者に質問を発し、両者の主張に分け入り、分解し、言い換え、摺り合わせ、統合し、といったプロセスを繰り返す、Facilitativeなアプローチをします。その際、積極的傾聴という言葉の技術を使います(実務でもしばしば用います)が、かなり苦労し汗をかきます。

私は争点を腑に落ちるように理解できるためには、当事者からストーリー(Narrative)を語って頂きたいと思っております。「ユニドロワの第●条第●項第●号に『～～～の要件に当たると、◎となる』と規定しており、問題文の параグラフ■に『* * *と書いた』と書かれており、これは～～～に当たるので、◎の効果が生じる」という主張を聞いても、腑に落ちません。「* * *と書いた」という背景には物語があるはず。その物語の背景には更にそれを包み込むNarrativeがあるはず。そのストーリーの中に◎という効果が適切に位置づけられ、そして締めとして法的三段論法のフィルターも通ることが示されれば、「なるほど」と思う訳です。実務でも、Narrativeの組み立てはとても大事です。

このように私にとっての交渉コンペは、私自身の貴重な修練の場です。対戦者には点数での評価がなされ、順位が付けられますが、それはあくまで参考までのことであり、参加する学生諸君は気にする必要はないと、私は思います。数ヶ月間、難問にがつぶり四つで正面から必死に取り組み、もがき苦しみ、様々な研究者や実務家と出会い、対話の中から大いに学ぶことこそ、大切な財産になります(私にとっても)。

なお、毎年問題には複雑な取引についての英文契約書が出てきます。その契約書には(問題が生じる原因の一つとなる)曖昧さや矛盾などが含まれています。その契約書を各当事者の法務部員の視点から、紛争を生じないように修正するとすれば、どのように手を入れるか、ということ各大学の授業で課題にしてみると面白いのではないかと思います。